

「東都名所霞ヶ関名所」にまとめられている10点の浮世絵の作者は、いずれも江戸時代後期の歌川派の絵師である。

歌川派とは、幕末から明治にかけて浮世絵界の一大勢力を成した流派である。歌川豊春にはじまり、豊春門下の初代豊国、豊広によって基盤が固められた。初代豊国の門下に国貞、国芳、豊広の門下に広重がいる。

## 歌川 広重 (うたがわ ひろしげ)

寛政9年(1797年)～安政5年(1858年)

江戸・八代洲河岸 定火消同心、安藤家の長男として生まれる。武家の出でありながら浮世絵師を志し、15歳のときに歌川豊広の門人となった。

はじめは美人画、役者絵、武者絵などを手掛けたが振るわず、天保4年(1833年)の「東海道五拾三次」で風景画家としての地位を確立した。

風景画に関しては葛飾北斎をしのぐ作画量で、構図や題材だけでなく、季節や天候、時間帯といった設定まで意図的に行った。

別号は一遊斎、一幽斎、一立斎。



「歌川広重肖像」  
歌川国貞(3代豊国)／画  
メトロポリタン美術館蔵

## 歌川 国貞 (うたがわ くにさだ) / 3代豊国

天明6年(1786年)～元治元年(1864年)

歌川豊国(初代)の門人。幼くして画才を認められ、豊国の門に入った。天保15年(1844年)、2代目豊国を称するが、正式には初名歌川豊重がすでに襲名していたため、その強引さから当時相当の悪評がたったといわれる。現在では、国貞の豊国を3代目と数える。

作域は幅広いが、特に美人画と役者絵に秀でている。幕末の浮世絵界では最大の勢力を形成し、生涯に描いた作品数も全浮世絵師中、最大数量であったといわれる。

別号は一雄斎、五渡亭、香蝶楼、富望山人など。



「今様見立 士農工商」のうち「職人」  
歌川国貞(3代豊国)／画 大英博物館蔵

## 歌川 国芳 (うたがわ くによし)

寛政9年(1797年)～文久元年(1861年)

歌川豊国(初代)の門人。文政10年(1827年)頃から版行され始めた「通俗水滸伝豪傑一百八人之一個」により一躍人気を博し、武者絵の国芳と呼ばれた。

作域は、美人画、役者絵、花鳥画、戯画、版本の挿絵、肉筆画など広範で、天保年間(1830年～1844年)頃からは多くの風刺画を描き、この方面における第一人者としても活躍した。洋風画法を取り入れた風景画にも優れる。

別号は一勇斎、朝桜楼など。



「通俗水滸伝豪傑一百八人之一個」のうち「跳澗虎陳達」  
歌川国芳／画 大英博物館蔵